

LIBRA SQUARE

Book

最近、おもしろかった本

『ゲド戦記 I 影との戦い』

アーシュラ・K. ルーグウィン 著 清水真砂子 訳 岩波書店 1050 円（税込）

主人公の成長過程、職業人としての苦悩… 読むたびに自分の境遇と重ねあわせて

先日、映画を見た帰りに、中学校以来再び原作を手にとって読んでみたのだが、なるほど、宮崎駿が常に枕元において読んでいたというだけあって、原作は子供向けのお話と片付けてしまうにはもったいない内容だ。

この「ゲド戦記」は、ヒューゴー、ネビュラの両賞を取った SF 作家のルーグウィンによって 1968 年から 72 年に書かれたファンタジー三部作である。

物語は竜と魔法の出てくる古典的なファンタジーものだが、ユングの影響を受けた作者の構成する内面描写の秀逸さとしっかりした世界観により、十分大人も楽しめる良書に仕上がっている（翻訳も良いのだろう）。

幼い主人公が魔法の才能を見いだされ、魔法学院に入り（ハリポタシリーズもここに影響を受けたに違いない）、仲間と競いながら成長していく過程は、自分の子供時代や修習時代の気持ちを思い出させたり、たびたび語られる「魔法使い」の心構えや警句は、同じように言葉に力の源泉を求める職業

のものとしては思い当たるところが多々ある。

ちなみに 2 巻以降はゲドの青年期から壮年期にかけての話で、映画は 3 巻目が基礎なので、ここまで読んでやっと映画はかなり無理な改変をしているとわかるが、それは別論。

全体を通して、経験を積むに従ってのゲドの知識人、職業人（それが魔法使いにもかかわらず！）としての苦悩を読み取ることができ、読むたびにそのときの自分の境遇と重ねて読める本である。それが説教くさく感じないのは、迫力がある本物のファンタジーだからだと思う。ぜひ子供にも読ませたい。

なお、著者は 18 年後にフェミニズム運動の方面から政治的批判をされた前三部へのアンチテーゼを含んだ続編 3 冊を書いており、こちらは必ずしもすべてが子供向けではない。

しかし、これまでの世界観をまとめ、著者の現在の哲学を示すものであり、一読の価値はある。

（会員 坂井 崇徳）



Cinema 心に残る映画

『スティング』

1973年／アメリカ／ジョージ・ロイ・ヒル監督作品

ラストシーンにびっくりする仕掛け しばし呆然,そして「ニヤリ」と笑みが

映画は楽しくなければ嫌！が持論の私。好きな映画の条件はやはり「ハッピーエンド」。中でも、最後に「ああ～」と感嘆し、観終ってスッキリ爽快な気分になれるモノが望ましい。さらに主人公が格好良ければ言うことはない。そんな私にとって、映画「スティング」はまさに最高傑作である。

舞台は1930年代のアメリカ。ロバート・レッドフォード演じる若い詐欺師フッカーは、うっかり組織の金を奪ってしまったために、相棒を殺され、組織に追われる身となるが、ポール・ニューマン演じる大物詐欺師ヘンリーと仲間たちの力を借りて大芝居をうち、組織に復讐を果たすという物語である。と、書くとなんだか重い話のようだが、「復讐」といっても「一杯食わせる」程度。どうやって組織を出し抜くのか、殺し屋と警察から逃げ切れるのか、仲間割れはあるのか、どれが芝居でどれが真実か…と、ぐいぐい引っ張られて、あっという間にクライマックスに至る。ラストシーンはここには書けないが、びっくりする仕掛けが用意しており（私は

「えっ？」と声を出すくらい、きれいに騙された）、観客はしばし呆然となった後、「ニヤリ」と笑みを浮かべることになる。

今回、久しぶりに観直してみたが、改めて「よく練られた話だなあ」と感心した。さすがはアカデミー賞7部門受賞である。復讐劇を軽妙で洒落た味に調理して観客までも騙す演出は、公開（1973年）から30年以上たった今でも全く色褪せないし、出演者も皆魅力的。ポール・ニューマンの格好良さに惚れ惚れするのはもちろんだが、脇役もいい。特にヘンリーの情婦がいわゆる「美人」ではないが「いい女」なのである。ああいう女性になりたいものだ。

主題曲、スコット・ジョプリンの「エンターテイナー」の調べが、「犯罪もの」とも「ギャングもの」とも違う、「スティング（＝チクッと一刺し）」の世界に運んでくれる。ぜひこの「だまされる快感」を味わってほしい。

（会員 岸本 史子）



『スティング』
発売元：ユニバーサル・
ピクチャーズ・ジャパン
価 格：1,800円（税込）
発売日：2006年9月21日
ユニバーサル・ザ・ベスト
キャンペーン商品